近隣空間における余暇活動の動向と特性について

近隣余暇関連施設に関する研究 その2

THE CHARACTERISTICS AND TRENDS OF LEISURE ACTIVITIES
IN NEIGHBORING DISTRICTS

Study on the leisure facilities in neighboring districts Part 2

川岸 梅和*, 北野 幸樹**

Umekazu KAWAGISHI and Koki KITANO

This study is based on the findings of investigations carried out on two occasions, in 1975 and 1990, into leisure activities participated in Takashimadaira and Shimada. The actual conditions in which the facilities and spaces in neighboring districts were utilized by people during their leisure time were analyzed. This was followed by the consideration of the mechanism of correlations between leisure activities and the leisure facilities in neighboring districts. The findings indicated that in the case of leisure facilities in neighboring districts, there was a particular correlation between the facilities distribution and the time spent for leisure activities.

Keywords: *leisure activity, leisure facility, neighboring district, time distribution, facility distribution*

余暇活動, 余暇関連施設, 近隣空間, 時間分布, 施設分布

1. はじめに

本稿は, 近隣空間での余暇活動及び近隣余暇関連施設の実態の分析から, 近隣余暇関連施設の施設計画についての基礎的知見を得ることを目的とした「近隣余暇関連施設に関する研究」の第2稿であり, 前稿^(註1)に引き続くものである。

前稿では, 余暇活動の実態を生活空間, 活動項目の側面から検討した。その結果, 多様な活動実態の中にも, 余暇活動の時間的側面からみると, 個室空間, 家・庭空間が主要な空間となっているが, 空間的側面からみると, 多種多様な活動を行う空間としての主要な役割は, 近隣空間が担っていることを明らかにした。また, 発生する活動は, 年齢に大きく影響されており, 性別によっても異なることが分かっている。

これらをふまえて本稿では, 近隣空間における余暇活動の実態を, 活動時間量・項目数と施設の空間分布の側面から検討し, その中にみられる傾向的特性を明らかにすることを目的としている。

2. 研究の内容

2.1 調査の概要

本稿における調査対象地域は前稿と同様であり, 大都市圏の計画供給された地域と地方小都市とにおける各々の居住者の余暇活動の

実態を比較するために, 異なる性格を考慮して, 東京都内の計画供給された住宅団地である高島平地域, 地方の都市圏に依存する小都市である島田地域の2地域を選定している。

調査対象地域の概要, 調査対象者数, 余暇活動調査の概要, 近隣余暇関連施設の実態調査の概要については, 前稿に示しているのを省略する。

2.2 余暇活動時間量の算定

余暇活動時間量は前稿で示したとおり, 現地での聞き取り調査を基に, 近隣空間における各施設・空間での活動項目別の消費時間量及び活動頻度より算定したものである。これらを各近隣余暇関連施設, 活動項目毎に1人1日当たりの平均消費時間量に換算し余暇活動時間量としている。

3. 近隣空間における活動項目別余暇活動^(註2) (図1)

両地域において, 1975年及び1990年に共通して, 男性女性共に余暇活動時間量の多い活動は, スポーツ(散歩を含む)となっている。男性と女性とを比較すると, 男性ではゲーム, 女性ではショッピングの時間量が顕著に多くなっている。

近隣空間において, スポーツ(散歩を含む)及びショッピングの時間量の総余暇活動時間量に占める割合は, 1975年及び1990年の平

* 日本大学生産工学部建築工学科 助教授・工修

** 日本大学生産工学部建築工学科 副手・工修

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, College of Industrial Technology, Nihon Univ., M. Eng.

Assistant, Dept. of Architecture, College of Industrial Technology, Nihon Univ., M. Eng.

均で、高島平地域では33%、島田地域では32%であり、両地域共に約1/3を占めている。また、1975年と1990年の2時点の両地域の平均を比較すると、1975年では35%、1990年では30%となっており、上位2種の占める割合は減少する傾向にある。

1975年及び1990年の2時点の変化をみると、女性のショッピングは減少する傾向にあり、また、ショッピングの時間量の中で都市圏の占める割合は増加しており、ショッピングの対象空間は、近隣空間からより選択範囲の多様化している都市圏へ依存するようになってきていると言える。

高島平地域においては、近隣空間における総余暇活動時間量は減少する傾向にある中で、男性女性共に、創作、教養・文化の時間量は概して増加する傾向にあり、男性の平日を除いてスポーツ（散歩を含む）も増加している。加えて、男性では団体活動、女性では家族交流、交際が増加する傾向にある。

島田地域においては、高島平地域と同様に近隣空間における総余暇活動時間量は減少する傾向にある中で、男性ではショッピング、女性では創作、団体活動の時間量は増加している。

近隣空間における主要な余暇活動は、身近な地域で容易に行うことができるスポーツや散歩等の日常的な活動や、日常生活に密接に関係するショッピング等であることが分かる。また、両地域共に概して創作活動（趣味的活動）は増加する傾向がみられる。

両地域に共通して、1975年及び1990年共に、近隣空間での余暇活

動項目数は概して他の生活空間より多くなっており、近隣空間における活動は多様化している。従って、近隣空間は日常生活に直接的に関係する活動を行うための主要な余暇活動空間であると言える。

4. 近隣空間における年齢層別余暇活動

4. 1 総余暇活動時間量（図2）

総余暇活動時間量について1975年と1990年の2時点と比較すると、両地域に共通して、50歳以上の高齢層において余暇活動時間量に増加傾向がみられるが、24歳以下においてはほとんど増加はみられない。

男性と女性の時間量の分布傾向は異なっており、男性では、概して低年齢層、高齢層で時間量が多くなっている。一方、女性では、概して25歳から39歳の中年層で時間量が多くなる傾向を示しており、その傾向は高島平地域において顕著にみられる。また、女性の平日では、島田地域よりも高島平地域の方が総じて時間量が多くなっている。これらは、男性の中年層は、両地域共に有職者が大部分を占めているのに対し、高島平地域の女性の中年層においては、有職者の占める割合の低いことが起因していると考えられる。

高島平地域と島田地域とにおいて、近隣空間での年齢層毎の総余暇活動時間量の分布傾向を比較すると、時間量の多少に相違はあるものの、時間量の分布パターンには両地域において幾つかの類似傾向がみられる。男性の平日においては、1975年と1990年共に時間量

図3 活動項目別余暇活動時間量 (年齢層別)

は低年齢層、高年齢層で多く、中年層で少ない傾向を示している。男性の休日においては、1975年では他と比較して相対的に時間量の分布のばらつきは少なくなっている。1990年では中年層の分布パターンは両地域で異なっているものの、7歳から29歳で年齢の上昇と共に時間量は減少し、55歳以上で年齢の上昇と共に増加しており、両地域で同様な傾向を示している。また、女性の平日においては、1975年では他と比較して相対的に時間量の分布のばらつきは少なくなっており、1990年では30歳から39歳で時間量が多く、40歳から54歳で少なく、65歳以上で最も多くなっている。女性の休日においては、1975年では25歳から34歳で時間量が多く、1990年では7歳から12歳及び65歳以上で最も多くなっている。

4. 2 活動項目別余暇活動時間量 (図3)

以下に、1975年と1990年の2時点の比較を通して、年齢層毎の活動項目別における主な余暇活動の傾向を示す。

1) スポーツ

男性の平日では、低年齢層及び高年齢層で多くなる傾向がみられるものの、時間量の分布は比較的一定である。

2) ショッピング

時間量は、女性の方が男性より非常に多く、その傾向は中年層で顕著であるものの、概して1990年において減少している。

全生活空間におけるショッピングの時間量の2時点の変化^{※3)}をみると、両地域共に減少しており、同様に近隣空間においても概して減少している。その一方で、都市圏におけるショッピングの1人1日当たりの平均時間量^{※4)}は、高島平地域の男性では3分増加しており、女性では10.75分減少しているものの、その減少は全生活空間における時間量の減少と比較して少なくなっている。また、島田地域の男性では0.75分、女性では2.25分増加している。ショッピングの時間量において都市圏の占める割合は増加しており、買い物を行う空間は、近隣空間のみならず、都市圏へと拡がり、都市圏に依存するようになってきていると考えられる。

3) ゲーム

女性ではいずれの年齢層においてもほとんど活動は行われていない。また、男性の方が女性より多くなっており、年齢層毎の時間量の分布にばらつきがみられる。

4) 家族交流

時間量は、総じて女性の方が男性より多く、また、高島平地域の25～39歳において時間量が多くなっている。

近隣空間の公園において行われる「子供の相手」「家族との談話」等の家族交流の1人1日当たりの平均時間量^{※5)}の2時点の変化をみると、高島平地域の男性では0.75分、女性では5.5分増加している。高島平地域において、近隣空間の公園は、家族交流の場としての利用の増加もみられ、また、それらの活動の受け皿としても有効に機能していると考えられる。

一方、島田地域においては、近隣空間の公園での家族交流の時間量は男性女性共に減少しており、家族交流の場としての役割は低下しているものと思われ、高島平地域と島田地域とにおいて、近隣空間での家族交流の傾向は異なっている。

5) 交際

比較的時間量が多く、各年齢層毎の時間量の分布にばらつきがみられる。概して女性の方が多くなっている。

図4 施設分布と余暇活動の変化

5. 近隣余暇関連施設の空間分布と余暇活動

近隣余暇関連施設の空間分布^{※6)}及び施設の種別、規模、余暇機能等に関する1975年と1990年の2時点の変化と、施設分類毎の余暇関連施設において消費される余暇活動時間量・項目数の2時点の変化との関係を整理する。

1) 飲食施設(飲食、飲酒、喫茶等)(図4)

1975年と1990年を比較すると、両地域共に余暇活動時間量の増加はみられず、近隣空間において、外食等の飲食に費やす消費時間量はあまり変化していないと言える。

しかし、施設数は大幅に増加しており、1人当たりの消費時間量の変化に影響されことなく施設発生していると考えられる。また、施設原単位^{※7)}は、1990年において、島田地域は高島平地域の約2倍と大きく異なっているものの、施設の分布は、両地域共に比較的ランダムな分布から、駅周辺に集中し、かつ線状に分布する同様な傾向になってきている。

2) 娯楽施設(ゲーム、カラオケ、映画等)(図4)

両地域において、余暇活動時間量・項目数共に減少しており、施設を利用する娯楽活動は減少傾向にある。

高島平地域においては、人口の増加と共に施設数は増加しているものの、都市圏での娯楽施設の利用の増加等により、近隣空間での1人当たりの娯楽施設利用は減少している。施設の分布は、駅周辺に集中して分布する傾向がみられる。

島田地域においては、郊外に立地する施設、或いは、都市圏(静岡市)での施設利用の増加等により、高島平地域同様に近隣空間での施設利用は減少しており、施設数も減少している。

施設数の変化は両地域において異なるが、施設の分布は、両地域共に駅周辺に分布する傾向がみられる。

3) レクリエーション施設(公園、運動公園、動物園、植物園等)(図5)

高島平地域は、計画供給された団地を含む地域であることから、施設数は多く、施設原単位も大きくなっている。また、1,000㎡未満の比較的小規模な施設が大幅に増加し、余暇活動時間量・項目数共に増加しており、身近な施設を日常的に利用する活動が多くみられる。1,000㎡未満の公園は、調査対象地域の比較的中心部に分布しており、2,000㎡以上の公園は、それらを取り巻くように周辺部に分散して分布しており機能分布が明確であり、居住者の多様な活動に対応し得る受け皿として機能していると言える。

島田地域は、施設数は増加しているものの、余暇活動時間量は増加しておらず、項目数においては減少している。また、施設の増加数は少なく、1990年における施設数は、高島平地域の約1/3であり、施設原単位も約1/2と小さくなっている。施設の分布は、小規模な施設の分布に偏りがみられ、自然発生的に大小の規模の施設がランダムに分布しており、身近な施設を利用できる範囲は限られていると言える。

4) スポーツ施設(図5)

高島平地域においては、施設数は増加するものの大半は屋外施設であり、1990年の施設数は、屋内施設2、屋外施設16となっており偏りがみられる。また、施設の分布は、1990年では比較的集中して分布する傾向がみられる。施設数の増加と共に余暇活動時間量は増加するものの、施設内容、施設分布にあまり変化はなく、余暇活動

スポーツ施設

図5 施設分布と余暇活動の変化

項目数は減少しており、余暇活動の多様化はみられない。

島田地域においては、施設原単位は大きく、余暇活動時間量も多くなっており、時間量・項目数共に増加している。また、施設数は増加し、1990年の施設数は、屋内施設6、屋外施設10となっている。施設の分布は、対象地域の広範囲にわたって分布しており、活発化、多様化する活動に対応して機能していると考えられる。

5) 学校施設（幼稚園、小・中学校、高等学校、養護学校等）

（図6）

高島平地域においては、学校開放を実施している学校数は、1975年と1990年の2時点と比較すると、7から12に増加し、余暇活動項目数も増加している。島田地域においては、学校開放を実施している学校数は、4から5とあまり変化はなく、余暇活動項目数は減少している。

学校施設においては、施設数にあまり変化はなく、施設原単位は両地域共に3.0程度となっている。また、施設の消滅はなく、施設の分布にあまり変化を生じないことは容易に推測できることである。従って、余暇活動は、学校開放の有無の影響を強く受けているものと考えられる。しかしながら、現状においては、利用手続きの問題、時間的・内容的制約があるために、余暇活動時間量の増加はあまり期待できない状況にあると考えられる。

6) その他の教育・情報施設（学習塾、英会話、書道、稽古事、習い事等）（図6）

施設数は、島田地域の方が多く、施設原単位も1990年において、島田地域14.5、高島平地域5.8と大きくなっている。また、両地域共に施設数は大幅に増加している。

高島平地域においては、都市圏（東京都内）での活動が活発であり、近隣空間における余暇活動項目数は減少している。しかし、余暇活動時間量は僅かに増加しており、近隣空間で容易に行うことが可能な活動の潜在的需要があるものと思われる。また、施設の分布は、1990年において、戸建て住宅地内に書道教室、音楽教室等の稽古事、習い事（趣味的活動）の施設が分布するようになっており、一方で、駅周辺に集中して分布する傾向もみられる。

島田地域においては、地方小都市という性格から、活動空間の需要は近隣空間に多く、余暇活動時間量・項目数共に増加している。施設の分布は、1975年には趣味的活動の施設のみの分布であったが、1990年には学習、趣味共に施設数が大幅に増加しており、比較的市街地中心付近に集中して分布する傾向がみられる。

7) 集会施設（集会所、公民館、市民会館等）（図7）

施設数は、島田地域の方が高島平地域より多く、また、施設原単位も1990年において、島田地域8.0、高島平地域3.2となっており、地域間格差は大きくなっている。

しかし、両地域共に、集会所、公民館等は、会合、サークル活動等に定期的に利用されており、余暇活動時間量・項目数共に増加している。

また、施設数も僅かに増加しており、施設の分布は、対象地域内に比較的ランダムに分布するように変化してきている。施設形態においては、複合（併設）している施設の増加が顕著であり、増加する施設は、公共の施設に限られている。集会施設は、近隣空間で容易に利用できる施設として多種多様な活動の受け皿としての主要な役割を担っていると言える。

図6 施設分布と余暇活動の変化

6. まとめ

本稿は、性格の異なる地域における近隣空間での余暇活動の実態について概略を捉えたものである。その主な特徴を以下に整理する。

1) 近隣空間における余暇活動は、概して高年齢層で時間量が増加し活発化する傾向にあるが、低年齢層での増加は少なくなっており、全生活空間的にみた余暇活動の傾向と同様である。また、近隣空間は主として子供、高齢者の活動空間として機能する割合が高くなっている。

2) 近隣空間において多種多様な余暇活動が行われている中で時間的側面からみた主要な活動は、スポーツ（散歩を含む）及びショッピングであり、総余暇活動時間量の約30%を占めている。また、男性ではゲーム、女性では交際の時間量が多くなっており、加えて、創作活動（趣味的活動）は増加する傾向がみられる。

近隣空間は、身近で容易に行うことができる日常生活と密接に関係する活動が行われる空間として機能していると言える。

3) 近隣空間において、総余暇活動時間量の減少に伴い、近隣空間での時間量も減少しているものの、高島平地域、島田地域共に、スポーツ施設、その他の情報・教育施設、集会施設における余暇活動時間量は増加しており、近隣空間における主要な余暇関連施設になっていると考えられる。

一方、飲食施設における余暇活動時間量の増加はみられず、また、娯楽施設においては減少しており、余暇活動の受け皿としての役割は希薄であると言える。

4) 近隣空間における飲食施設、娯楽施設、スポーツ施設、学校施設、その他の教育・情報施設、集会施設においては、各々の施設毎に施設原単位は異なるものの、各施設で消費される余暇活動時間量の2時点の変化と1990年の施設分布の状況は、高島平地域と島田地域とにおいて同様な傾向を示しており、概して地域差は少なくなっていると思われる。

その中で、レクリエーション施設における余暇活動の差異に、計画供給された住宅団地と地方小都市との立地特性をみることができる。

5) 近隣空間における余暇活動の活性化、多様化への対応には、レクリエーション施設における小規模施設の充実による日常的活動への対応、スポーツ施設における屋内施設の整備、学校施設における施設開放の推進、集会施設における複合（併設）化による活動時の選択性の増大等、施設数の増加に限らず、多様化する活動志向に対応し得る余暇機能の整備、それら余暇関連施設の余暇機能分布の適正化が必要不可欠であると考えられる。

今後の課題として、近隣空間における異種施設での余暇活動の実態と余暇関連施設の分布形態との関係性を明らかにしていく必要があると考えている。

注

- 川岸梅和、北野幸樹：時間的・空間的側面からみた余暇活動の動向と特性について 近隣余暇関連施設に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集 第487号、pp. 167～176、1996. 9
- 前稿^{註1)}において分析対象とした余暇活動項目13分類の内、近隣空間において、余暇活動時間量の極めて少ない「スポーツ見学」「マスメディア」「旅行」の3分類を除いた10分類を分析対象としている。また、余暇活動項目における活動内容の詳細に関しては、前稿^{註1)}を参照のこと。

集会施設

図7 施設分布と余暇活動の変化

- 全生活空間におけるショッピングの余暇活動時間量については、前稿^{註1)}の表5に示すとおりである。
- 都市圏におけるショッピングの1人1日当たりの平均時間量は以下に示すとおりである。

	高島平				島田			
	男性		女性		男性		女性	
	平日	休日	平日	休日	平日	休日	平日	休日
1975年	3.5	15.0	8.0	51.0	2.0	11.0	3.5	15.0
1990年	9.0	15.5	7.5	30.0	2.0	12.5	2.0	21.0

単位：分（1人1日当たりの平均時間量）

- 家族交流の余暇活動項目に関しては、前稿^{註1)}の表3を参照のこと。また、近隣空間の公園において行われる「子供の相手」「家族との談話」等の家族交流の1人1日当たりの平均時間量は以下に示すとおりである。

	高島平				島田			
	男性		女性		男性		女性	
	平日	休日	平日	休日	平日	休日	平日	休日
1975年	1.0	3.5	5.0	5.0	2.5	1.0	2.5	3.5
1990年	1.0	5.0	11.0	10.0	0.0	1.0	2.5	0.0

単位：分（1人1日当たりの平均時間量）

- 調査対象地域の範囲は、前稿^{註1)}の図1に示すとおりである。
- 施設原単位は、人口1万人当たりの施設数（施設数／1万人）を表す。各施設の詳細は前稿^{註1)}に示すとおりである。

参考文献

前稿^{註1)}と同じ。

（1996年7月9日原稿受理、1997年3月17日採用決定）